バレー部の沿革（創部からの10年）

小石川高校バレー部の沿革

（旧制の都立第五中学校時代）

昭和20年　　20年4月13日夜の米機の爆撃により駕籠町の校舎が焼失し、一時学童疎開で空き家になった文京区明化国民学校に移転したが、11月には滝野川の陸軍の施設跡（旧東京第一陸軍造兵廠内青年学校・現、都立王子総合高校の場所）に再移転し、授業を再開した。この年、体育の竹内利貞教諭を中心に同好会的なバレー部活動が始まった。

昭和21年　　正式な部としての活動が始まった。9月に東京文理科大学（後の教育大学、現在の筑波大学）でバレーをなさっていた飯塚（めしづか）先生が体育の教諭として赴任。
飯塚先生の仲介で、第十高等女学校（現、都立豊島高校）と親睦を深め、練習試合を行なったりした。（まだ戦後まもなくで、男女の仲の距離があった時代にしては珍しいことであった。――――――旧25香田則彦氏 談）
11月に文京区同心町校舎（旧東京府立実習補修学校及び小石川高等小学校・現、文京区立茗荷台中の場所）に移転。

（新制高校時代）

昭和22年　　新学制（6.3.3制）実施。
東京都立第五新制高等学校となり、旧制中学の2・3年生は同併設中学校の生徒となる。
飯塚先生の指導のもとに力をつけたバレー部は、この年の春の関東大会予選で決勝まで進出した。この大会で本校の波多野収通氏（04）が東京都のベストナイン（ＨＣ）に選出された。
7月21日から31日まで、関東大会で対戦し親しくなった群馬県立渋川高校で合宿をおこなった。この合宿がバレー部の最初の合宿である。
　　顧問・飯塚先生

昭和24年　　この年から男女共学となり、女子生徒12名が入学した。
　　顧問・土橋先生

昭和 25 年　　1 月、東京都立小石川高等学校と校名改称。
4 月から本格的な男女共学になり、百名を越す女子生徒が入学し、バレー部にも多数の女子が入部した。
合宿を 8 月 10 日から 20 日まで千葉県館山市の県立安房高校の校庭でおこなった。宿舎は同校の柔道場であった。戦後の食糧難の時代で、外食券を持参しての合宿であった。
参加部員は 9 名。
　　顧問・土橋先生。コーチは福田光治氏。

昭和 26 年　　4 月 30 日に行なわれた憲法記念大会の２回戦で都立第三商業と対戦したが、1 対２で惜敗した。結局、この大会は都立第三商業が優勝した。
11 月に女子が初めて秋季大会に参加した。
夏休みに千葉県の保田で合宿。
　　顧問・土橋先生。コーチは福田光治氏。

昭和 27 年　　8 月 18 日から 24 日まで、長野県志賀高原・発哺の御茶ノ水大学の寮で合宿。宿舎だけの借用で賄いはなかったので、女子部員 4 名に食事や洗濯の世話をお願いした。また、コートの場所だけはあったが、設備がなかったので、学校からポールやネットを持参しての合宿であった。
ＯＢと現役の会「五中クラブ」が発足。
同心町校舎の狭くて天井の低い講堂での不自由な練習を解消しようと、駕籠町の焼け跡のグランドの隅に、瓦礫を取り除き、土砂を篩にかけ、手作りでコートを作った。
　　顧問・土橋先生。
　　コーチ・男子は近藤誠男氏、女子は櫛島久光氏。

昭和 28 年　　春の関東大会予選で、ベスト 16 に入る。
4 月 26 日、駕籠町コートの落成記念として、現役とＯＢの親善試合を実施。「五中クラブ」として、春の大会に参加し日本鋼管（現・ＮＫＫ）と対戦、惨敗。この時の日本鋼管には松平康隆氏がバックで出場していた。
8 月 23 日から 29 日まで、松本市浅間温泉の県営運動場にて合宿。

顧問・土橋先生。
コーチ・男子は近藤誠男氏、女子は櫛島久光氏。

昭和 29 年　7 月 21 日から 30 日まで、松本市浅間温泉の県営運動場にて合宿。女子が初めて合宿に参加した。
顧問・土橋先生。
コーチ・男子は波多野義治氏、女子は阿部元一氏。

昭和 30 年　8 月、松本市浅間温泉の県営運動場にて合宿。
顧問・土橋先生。
コーチ・男子は高橋一郎氏、女子は須永悦子氏

昭和 31 年　春の都大会でベスト８に入り、大宮で行なわれた関東大会に出場。

30 年代前半までのボールは、現在のようなシームレスではなく、革を 12 枚縫い合わせたボールであった。縫い目の糸が切れて破れることが多かったので、縫い目の補修や縫い目に油を塗り込むのが下級生の仕事であった。また表の革と中のチューブは別々で、革の割れ目からチューブを中に入れて、空気入れ（エアーポンプ）で膨らませ、割れ目はニードルという大きな編み棒のようなものに革紐を通して、編み上げ靴の紐のように編んで閉じた。下手な者がやると、その部分が出っ張って、パスやサーブをする時に手に当たって非常に痛かった。

ボールは全体で 5、6 個しかなかったので、サーブ練習の時などはボールの奪い合いであった。

シューズも今のようにバレーボールシューズなどというしゃれたものはなく、ズックの運動靴であった。それも底のゴムは再生ゴムですぐに磨り減ってしまうので、誰の紹介だったか失念したが、ゴム工場で靴の底に生ゴムを貼ってもらって使用していた。

試合は、雨天の場合を除いて、すべて屋外で行なわれたので、風や日光に大いに影響された。雨天の場合は、体育館の設備がある会場が少なかったので、大会が延期になったり、体育館のある会場に分散して行なわれた。

〇当時の 9 人制のネットの高さと、コートの広さ。

高校男子	高校女子
ネットの高さ・・・・・・2m20ｃｍ	ネットの高さ・・・・・・2m
コートの広さ・・・・・・10m50ｃｍ×2	コートの広さ・・・・・・9m×2

沿革の参考に同窓会ホームページから校舎物語を引用

紫友同窓会 公式ホームページ　アーカイブ

地図と写真で見る

五中・小石川の校舎物語

（紫友同窓会会報 第41号の記事に加筆）

現在 都立小石川中等教育学校が建つ場所は、1918年（大正7年）に 府立五中が創立した時と同じ校地です。 第二次世界大戦の戦災のために校舎は全焼し、疎開 と 2回の移転 を余儀なくされましたが、1957年（昭和32年）に "駕籠町" に戻ってくることができました。 五中・小石川 の95年の歴史を、校舎の変遷からたどります。

大 正 時 代　　：　開校前夜

1918 年（大正 7 年） 8 月 17 日 ： 東京府立 第五中学校の設置認可

10 月 5 日 ： 開校の告示、　校地は現在地と同じ

山手線は 1910 年（明治年）に複線化され、中仙道には市電も走っていっそう便利になってきた巣鴨附近。

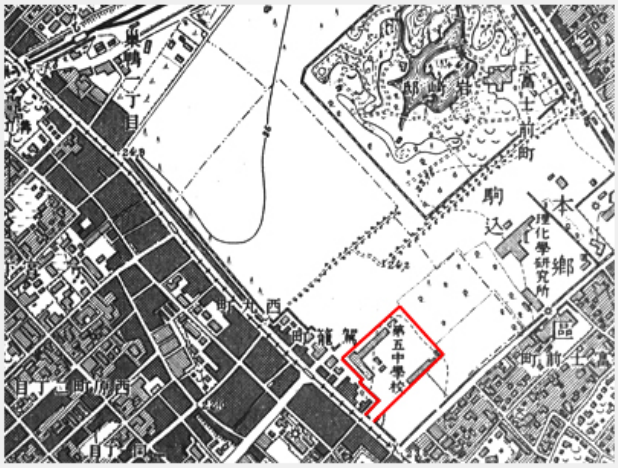
校地は巣鴨病院の前庭だった場所で、当時の住所は、

東京府東京市小石川区 駕籠町 41 番地

開 校

1919年（大正8年）4月1日：東京府立 第五中学校 開校

校舎は一部分を建設した状態で開校されました。 現在の不忍通りがなかったため、正門は中仙道側となりました。（下図 参照）



1916年（**大正10年**）の地図

明治42年測量、
大正10年第2回修正測量
「早稲田」に加筆

大日本陸地測量部/国土地理院
地図サイズ 400 × 300

現六義園の周りは整地されて、大和村分譲地となります。 この地図では、まだ校地が広がる前の状態。 校舎も一部しかできていません。

昭 和 時 代 ：

1930年（昭和5年）2月：**講堂**が着工、 同年 12月 竣工

講堂は後に戦災で大きな損傷を被りますが、基本構造はそのままに修復されて、長く使われました。 写真の撮影年は不詳。

1932 年（昭和 7 年） 9 月 ： 水泳プール 開設

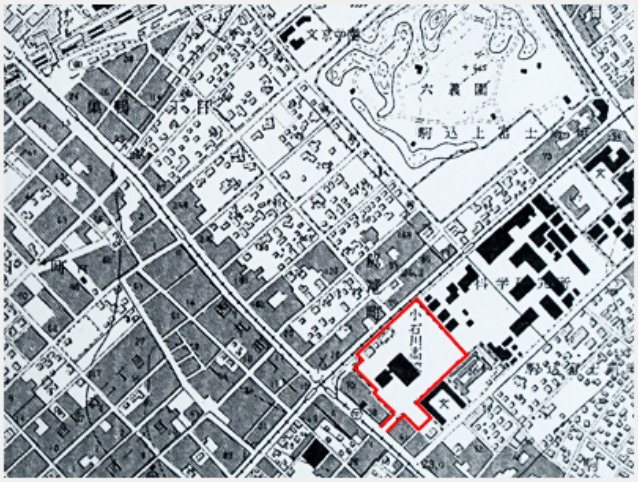
駕籠町交差点上空から。 校舎の配置は 1929 年（昭和 4 年）の地図と同じです。屋外プールは戦災を乗り越え、講堂と同様に、平成の改築が行われるまで 実に 60 年間にわたって授業や部活で活用されました。

1943 年（昭和 18 年） 7 月 1 日： 東京都制施行で、都立第五中学校と改称
1945 年（昭和 20 年） 4 月 13 日 から 14 日： 空襲により校舎全焼。
4 月 25 日： 東京都 明化国民学校に疎開

同心町校舎の敷地は狭く、校庭はアスファルト、暗灰色の校舎は西洋の僧院を思わせる陰気な建物でした。 当初は高等小学校（翌年に文京三中となる）や、夜学の工業高校との同居で、管理上の苦労が絶えなかったといいます。 男子生徒の体育の授業は駕籠町の旧五中グラウンドまで移動して行われていました。
1947 年（昭和 22 年） 3 月 15 日：
市街地編成により、小石川区と本郷区が合併して 文京区 となる。
1948 年（昭和 23 年） 4 月 1 日：
新学制施行により、都立第五新制高等学校 と改称
戦後の駕籠町校舎の様子

隣地、後の理化学研究所の屋上から。 撮影年月は不明ですが、中仙道沿いには家が建っていますから、前掲の 1947 年（昭和 22 年）よりは後の撮影です。焼け跡はそのままですが、グラウンドでは同心町校舎から来た生徒たちの体育の授業が行われています。
1950 年（昭和 25 年） 1 月： 校名を 東京都立小石川高等学校 と改称
校名改称にあたっては生徒に希望調査が行われましたが、澤登哲一校長の一言、「地名が一番簡潔」という理由で、同心町校舎時代の 1950（昭和 25）年に「小石川」に定まりました。

その一方で、前述のように同心町校舎の環境が悪かったため、駕籠町校舎への復帰の議論は早くから出ていました。
ところが 1950 年頃、旧五中の焼け跡地に都営住宅を建てる計画が持ち上がり、計測のための杭打ちが始まると、澤登校長はその杭を夜のうちに引き抜く、ということを何度も繰り返しました。　五中・小石川高の本拠地はあくまで駕籠町にあり、いつか復帰するのだという強い意思を表明するため、土地の権利を手放さず、澤登校長は都に対して一大反対運動を展開して、校地として復活決定に持ち込みました。



1956年(昭和31年)の地図

明治42年測量、
昭和31年第5回修正測量
「早稲田」に加筆

国土地理院
地図サイズ 400 × 300

黒い色はコンクリート造で、小石川高校では残った講堂に加えて 新しく前掲写真の B棟だけができています。 そして今度はプールも載っています。

1961年(昭和36年)7月：**体育館**が完成

1971年(昭和46年)3月：C棟に4教室増設して 三期工事完了

▼がC棟、後年 1985年(昭和60年)の写真

平 成 時 代 ：

1992年(平成4年)3月：**新校舎** 一期工事完成
4月：旧校舎の取り壊し開始

1994年(平成6年)5月：二期工事完成

11月：校舎改築落成式

2006 年（平成 18 年） 4 月：中高一貫 6 年制の 東京都立小石川中等教育学校開校

2011 年（平成 23 年） 3 月 15 日： 東京都立小石川高等学校 閉校

閉校式が行われましたが、今も小石川 の名は引き継がれています。

出典ホームページ

http://www.shiyu-dosokai.sakura.ne.jp/archives/a_bokou/sh-story.html

国土地理院所有の地図・空中写真について ：

ホームページ利用時の 400 × 300 ドット以下は利用許可申請 不要です。

校歌

校歌

作詞　伊藤　長七
作曲　北村　季晴

豊葦原の中原と　源遠き文明の
拓きましけん日本武　科学の道に分け入りて
尊のみいつ吾嬬路に　ひともと咲ける野の花の
古りし歴史は二千年　ゆかりの色を翳す時
今將た仰ぐ帝城の　立つるやここに創作の
武蔵の国ぞ大いなる　真理をきそう志

流れも清き多摩川の　菅の荒野を飛ぶ鷺の
水にあらひて生まれたる　羽風も高き飛鳳の山
男心は東海に　白雲遠き高原に
聳えて高き不二の山　行く手の森を眺むれば
曙近き人の世の　小草の露に命あり
彼方の空ぞなつかしき　吾ふむ土に力あり

豊島の里に程近く　平和の光今更に
樹立も深き岡の辺に　五州の海に輝きて
結ぶや少き人情　恵の波のいやひろく
吾学やの開拓に　八州の外に布くところ
理想の鍬を振り上げて　振るわんかなや開拓の
二つの腕の勇む哉　吾が校友の精神を

五中健児の歌

作詞　井上　宗助

曙川台の朝風に　団結親和一もとの
はためく吾等の校章旗　ゆかりの草をかざしつつ
仰ぐ紅顔一千の　学びの広野ひらきゆく
眼差し見よや輝きて　若人起てや開拓の
崇き理想の影を追う　魂は熱き血と燃えつ
これぞ五中　五中の健児　これぞ五中　五中の健児

天然とはた人間の　
有形無形限り無く　
未来の天地われを待つ　
鍛えんかなや開拓の　
不撓の気魄ゆるぎなく　
これぞ五中　五中の健児

出典：http://www.shiyu-dosokai.sakura.ne.jp/kouka/kouka.html

お礼：
「小石川高校のバレー部の沿革」は、04 回／1952 年卒業の近藤誠男氏により作成されました。何回か更新をされています。
今回の内容は、平成 25 年 10 月 2 日に送付された原稿に基づいています。